



TITLE:

日英ノ物價

AUTHOR(S):

河田, 嗣郎

CITATION:

河田, 嗣郎. 日英ノ物價. 經濟論叢 1916, 3(3): 445-451

ISSUE DATE:

1916-09-01

URL:

<https://doi.org/10.14989/127076>

RIGHT:

京都帝國大學法學科大學

經濟論叢

大正五年九月一日發行

第三號

第三卷

論說

聯合國經濟同盟^{ニ對スル}我國ノ態度

國防稅ノ當否(二)

でうあつぎ・ひゆーむノ經濟學說(五)

『座』ノ研究(二)

兌換券ト物價ト輸出入ノ關係^{ヲ論ズ}

資本ノ眞概念ノ發展(三、完)

雜錄

小野塚牧野兩博士ノ新著

不換紙幣流通ノ根據^{ニ就テ}福田^{博士ニ答フ}

びゆつひあーノ經濟^達發^達階段^{ニ非ズ}說^{ハ其獨創}

最低賃金ノ制度ニ就キテ

日英ノ物價

手ノ器用ト其脩養

『通俗經濟文庫』卷一ヲ讀ミテ

『瀧本誠一^{氏ノ草芽}危言摘義^{ニ就テ}解題^{ニ就テ}』補遺

法學博士 戸田 海市

法學博士 神戸 正雄

法學博士 福田 德三

文學博士 三浦 周行

法學博士 小川 郷太郎

法學博士 河上 肇

法學博士 福田 德三

法學博士 戸田 海市

法學博士 神戸 正雄

山本美越乃

法學士 河田 嗣郎

法學士 財部 靜治

法學博士 河上 肇

鈴木 券太郎

(載 轉 禁)

日英ノ物價

河田 嗣 郎

一 平時ト云ハズ戰時ト云ハズ物價ニ關スル問題ハ一般ニ甚ダ重要ナ問題デアルガ、特ニ現下ノ時局ニ際シテ戰後ノ經濟狀態ヤ貿易關係ヤニ就イテ攷察ス可キ必要ナル事情ノ下ニ於テハ、更ニ一層物價ニ關スル實況ノ調査研究ヲ必要トスル。最近ニ得ラレタ材料ニ依リ少シケル英吉利ノ物價ノ現況ト我國ノソレトヲ窺ツテ見ル。蓋シ研究ノ資料ヲ供セムガ爲メニ外ナラヌ。

二 先ツ英吉利ノ物價趨勢ニ就イテ見ルニ、其ノ一昨年末來ニ於ケル騰貴ノ狀勢ハ著大ナモノデアル。¹⁾試ニ「すたちすと」誌²⁾ノ指數ニ依リ一八六六―七七七年ノ十一年間平均(二〇〇)ニ對スル四十五商品ノ平均價格ノ變動ヲ示シテ見ヤウ。

年 平均	月 平均
一八一八―一八二七年.....二二	一九一四年一月.....八二
一八二五年.....二七	同 七月.....八二
一八七三年.....二二	同 八月.....八二
一八七八―一八七七年.....九	同 十二月.....九
一八九〇―一八九九年.....六	一九一五年四月.....一〇五

雜 錄 日英ノ物價

一九〇六―一五年.....三	同 五月.....一七・三
一八八〇年.....八	同 六月.....一七・四
一八九六年.....七	同 八月.....一七・〇
一九〇六年.....七	同 九月.....一七・八
一九〇七年.....六	同 十月.....二〇・〇
一九〇八年.....五	同 十一月.....二二・一
一九〇九年.....六	同 十二月.....二六・四
一九一〇年.....六	一九一六年一月.....二二・六
一九一一年.....六	同 二月.....二七・〇
一九一二年.....五	同 三月.....二七・四
一九一三年.....四	同 四月.....二四・二

右表ニ照シテ之ヲ觀ルトキハ、開戰以後ニ於ケル英國物價騰貴ノ歩合ハ一九一四年七月(即チ開戰前月)ノ指數八二・四ニ對シテ本年四月ノ指數一三四・二デアツテ、其差正ニ五一・八トナリ、之ヲ一昨年七月ノ指數ニ對スル歩合トシテ見レバ實ニ六二・九%ニ當ツテ居ル。即チ開戰以來一年九ヶ月間ニ於テ英吉利ノ一般物價ハ六割三歩弱ノ騰貴ヲ爲シタ次第デアル。

更ニ之ヲ四、五ノ重要ナル貨物ノ種類ニ分ツテ示セバ左表ノ如クデアル。³⁾(同ジク一八六七―七七年平均ヲ標準―一〇〇―トスル)

食料品	鐵產品	纖維品	雜品	合計
一八七三年.....一〇五	一四	一〇五	一〇六	二二

1) 本誌第二卷第三號拙稿「英國ノ食料品ト物價」参照
 2) The Statist, may 13, 1916
 3) Journal of the Royal Statistical Society, Vol. LXXIX Part 2, march, 1916, p. 189-1. The Statist, ibid

[illegible]

	十年平均	
一九〇六—一五年……	七	二二三
一八九〇—九九年……	六	二二
一八七八—八七年……	五	二二
一八一八—一七七年……	四	二二
右示ス所ニヨレバ、昨年ノ平均指數ハ一〇八デ アツテ、其ノ前二年ニ比スレバ正ニ二割七歩ノ	三	二二

騰貴ヲ見タ。尙ホ北米合衆國ニ恐慌ノアツタ
一九〇七年ノ翌年ノ指數ガ七三デアリ、一九〇
二、三年ノソレハ六九デアリ、一八九六年ノソレ
ハ六一ニ過ギナイコトヲ比較上忘レテハナラ
ス。卽チ昨年ノ平均指數ハ一八六七―七七
年ノ標準指數ヨリモ八歩高ク、最後ノ十年平均指數
ハ二ヨリモ三割二歩高ク、最低ノ「レコード」ヲ
示シテ居ル一八九〇―九九年ノ平均指數六六ニ
比スレバ實ニ六割三步ノ騰貴ヲ示シテ居ル。然
シ昨年ノ平均指數ハ之ヲ普佛戰爭ノ後ヲ承ケタ
ル一八七三年ノ平均指數一一ニ比スレバ尙ホ
多少下位ニ在ルハ注意ス可キ所ニ屬スル。

然リ而シテ昨年ニ於ケル物價騰貴ノ原因中ニ在
ツテハ、船賃ノ大騰貴ト云フ事ガ頗ル重キヲ爲
スヲ知ラネバナラヌ。試ニ船賃ノ騰貴ノ有様ヲ
見ルニ、北米合衆國大西洋岸諸港ヨリ英國ニ到
ル穀物運賃ハ、戰前ニ在ツテハ「くおーたー」
ニ付キ約二志デアツタモノガ、一昨年末ニハ七
志六片ニ上ボリ、昨年三月ニハ一一志トナリ、九
月ニハ八志九片トナリ、十二月末ニハ一七志六

片マデ上ツタ。即チ昨年平均ニ於テ一〇志ニ片ヲ示シテ居リ、之ヲ一昨年ノ平均ニ志七片ニ比スレバ實ニ驚ク可キ大暴騰ト謂ハネバナラス。尙ホ近キ年次ノミニ關スル調査ニ基イテ、開戦前ト其後トノ物價變動ノ狀況ヲ示ス爲メニ、左ノ月別表ヲ掲ゲテ置ク。(一九〇一—〇五年平均ヲ標準トスル)

	穀物及他ノ 肉類食品	纖維 品	礦物 雜品	合計 歩合
一九〇一—〇五年平均	五〇〇	五〇〇	五〇〇	一五〇〇
一九一三年第一期	五九四	五八八	五九二	一七七四
同 第二期	五八〇	五四四	五七二	一六九六
同 第三期	五八五	五五九	五七二	一七一六
同 第四期	五五三	五五五	五九一	一六九九
一九一四年一月末	五五二	五五三	五九〇	一六九五
同 二月末	五七二	五五三	五九二	一七一七
同 三月末	五五〇	五五七	五九二	一七〇〇
同 四月末	五五〇	五五七	五九二	一七〇〇
同 五月末	五五〇	五五七	五九二	一七〇〇
同 六月末	五五〇	五五七	五九二	一七〇〇
同 七月末	五五〇	五五七	五九二	一七〇〇
同 八月末	五五〇	五五七	五九二	一七〇〇
同 九月末	五五〇	五五七	五九二	一七〇〇
同 十月末	五五〇	五五七	五九二	一七〇〇
同 十一月末	五五〇	五五七	五九二	一七〇〇
同 十二月末	五五〇	五五七	五九二	一七〇〇

雜錄 日英ノ物價

一九一五年一月末 七六六 四三三 五五二 七六八 一六六五
 同 二月末 八四四 四二五 五六一 七六一 一四四二
 同 三月末 八四四 四二五 五六一 七六一 一四四二
 同 四月末 八四四 四二五 五六一 七六一 一四四二
 同 五月末 八四四 四二五 五六一 七六一 一四四二
 同 六月末 八四四 四二五 五六一 七六一 一四四二
 同 七月末 八四四 四二五 五六一 七六一 一四四二
 同 八月末 八四四 四二五 五六一 七六一 一四四二
 同 九月末 八四四 四二五 五六一 七六一 一四四二
 同 十月末 八四四 四二五 五六一 七六一 一四四二
 同 十一月末 八四四 四二五 五六一 七六一 一四四二
 同 十二月末 八四四 四二五 五六一 七六一 一四四二

是ニ因テ是ヲ觀レバ、各種商品ハ其ノ合計歩合ノ示ス所ニ依ルト、開戦ノ月ヨリ俄カニ騰貴シ來リ、昨年四、五月迄騰貴一方ノ勢ヲ示シタモノガ、其後六、七、八月ト三月ダケ少シ下向トナツタガ、九月カラハ又騰貴一方ノ勢ヲ加ヘ來ツテ十二月末ニ於テハ頗ル著大ナル騰貴歩合ヲ示シタ。斯クテ戦前ニ比シ凡ソ五割ノ騰貴ヲ示シテ居ルノデアル。

三 次ニ食料品ト原料品ノ價格ハ戦時ニ於テハ特ニ注意ヲ要スルモノデアルカラ、少シク其ノ全體平均及ビ重要品種ニ就イテ、英國ニ於ケル騰貴ノ狀態ヲ示シテ見ヤウ。

4) Journal of the Royal Statistical Society, ibidem.
 5) The Economist, Commercial History and Review of 1915. Vol. LXXXII, Feb. 19, 1916

先ヅ食料品ト他ノ原料品トノ平均價格ノ上ニ於ケル比較ニ就イテ觀レバ左表ノ如キモノカアル。

購買歩合

一八九六年	一九一一年	一九一四年	一九一六年
七月	四月	十二月	五月
六月	十二月	五月	八月
七月	十二月	五月	八月

食料品 六〇・〇

七三・八

九〇・九

一一・四

原料品 六六・六

八七・七

九二・一

一三・四

即チ開戦以來昨年末ニ至ル迄ノ間ニ於テ、食料品ハ凡ソ五割ノ騰貴ヲ爲シ、原料品ハ四割四分ノ騰貴ヲ爲シタ。

尙ホ食料品ニ就イテハ其ノ重要品種ノ一封度ノ年平均卸賣相場ヲ上ゲテ置ク。本年ノ相場トシテ示サレタルモノハ一月三十一日ニ終ル六ヶ月間ノ平均相場デアアル。(價格單位片)

一八九六年	一九一一年	一九一四年	一九一六年
バーコン及ハム	四・九六	六・六	一〇・三
バター	一・五	一・四	一・八
チーズ	五・四	七・二	九・四
麥粉	一・七	一・八	一・八
ライド	三・四	五・〇	五・九
ミール	一・三	一・四	一・七
砂糖	一・四	二・五	三・八
茶	一・七	一・八	二・五

右諸品ノ中、砂糖及ビ茶ノ騰貴ヲ促セル主ナル原因ハ消費課税ニ在ルトセラレテアル。

四 扱テ翻テ、我國ニ於ケル物價ノ趨勢如何ニト見ルニ、日本銀行ノ調査ニ係ル大正三年(一九一四年)一月以降ノ各月平均指數ハ左表ノ通りデアアル。

三年一月	二〇・六	四年一月	二〇・六	五年一月	二四・六
同二月	二二・六	同二月	二二・六	同二月	二五・〇
同三月	二二・六	同三月	二二・六	同三月	二五・三
同四月	二二・六	同四月	二二・六	同四月	二五・三
同五月	二二・六	同五月	二二・六	同五月	二五・三
同六月	二二・六	同六月	二二・六	同六月	二五・三
同七月	二二・六	同七月	二二・六	同七月	二五・三
同八月	二二・六	同八月	二二・六	同八月	二五・三
同九月	二二・六	同九月	二二・六	同九月	二五・三
同十月	二二・六	同十月	二二・六	同十月	二五・三
同十一月	二二・六	同十一月	二二・六	同十一月	二五・三
同十二月	二二・六	同十二月	二二・六	同十二月	二五・三

右表ニ因テ是ヲ觀ルト我國ニ在ツテハ歐洲戰爭ト我國ノ戰爭加入トハ、却テ一時物價ヲ低落セシメ、其勢ハ一昨年末ニ於テ最モ著シク、其後ハ稍々額勢回復ニ向ツタケレドモ、昨年中ハ戦前ニ比シテ餘リ多クノ騰貴ヲ見ナカッタ。然ルニ昨年ノ終頃ヨリハ漸クニシテ騰貴ノ勢ヲ増シ來

6) Journal of the R. S. S. ibid. The Statist ibid.
7) The Economist, may 6, 1916.
7) 大阪朝日新聞本年七月十二日

リ本年三月ヲ以テ其ノ絶頂ニ上ボリ、其後又少シク軟弱ニ傾イテハ居ルガ、六月ニ於テモ尙ホヤハリ相當ニ顯著ナル騰貴ノ状態ヲ呈シテ居ル。

我國ノ物價状態ハ、右示ス所ヨリシテモ既ニ之ヲ窺知シ得ラルルガ如ク、之ヲ英國ナドノ状態ニ比シテ兎角少シク亂調子デアル。英國ノ物價ガ開戦後定マツタ歩調ヲ以テ騰貴一方ニ向ツテ居リ、然カモ其ノ騰貴歩合ニ著シキ不調子ナキニ反シテ、我國ノ物價ハ下ルカト見レバ又上ガリ、騰ルカト思ヘバ又下リ、開戦以後ニ於テモ二年足ラズノ内ニ於テ、二度騰貴ノ勢ヲ成シテ三度下落ノ情勢ヲ依ツテ居ル。是ハ我國ノ經濟組織ノ未ダ不完全ニシテ市場ノ體制ノ幼稚ナルガ爲メニ、需給ノ調節ノ行ハルルコトノ圓滑ナルヲ得ザルト、投機ノ影響ヲ受クルコトノ大ナルトニ、因ルモノト見ルノ外ハナイ。

而シテ昨年ノ終頃以來著シキ騰貴ノ勢ヲ成スニ至ツタ原因ハ主トシテ軍需品ノ需要増加ト、或種ノ貨物ノ輸入困難其他ニ依ル供給不足ト、之

ニ加フル思惑トニ存スルモノデアル。此ノ事實ヲ示スガ爲メニハ貨物ノ種類ヲ區別シテ其ノ價格變動ノ狀況ヲ見ルヲ必要トスル。左ニ東洋經濟新報社ノ調査ニ依ル指數ヲ掲ゲテ其ノ一斑ヲ窺ツテ見ヤウ。(東京卸賣相場)

大正二年一月末
二年 最 最高 100.0 其他 織物及 金屬 雜品
最 最低 96.6 食品 其原料 100.0
三年 最 最高 98.0 100.0
最 最低 94.0 96.6
四年 最 最高 98.0 100.0
最 最低 94.0 96.6
五年 最 最高 98.0 100.0
最 最低 94.0 96.6
同 二月末 98.0 100.0
同 三月中末 98.0 100.0
同 四月中末 98.0 100.0
因是觀是、戰前ニ比較シテ著シク騰貴シタモノハ纖維品ト金屬ト所謂雜品トデアツテ、穀物ニ至ツテハ却ツテ下落ノ勢ヲ示シテ居リ、其他ノ食料品モ僅カバカリノ騰貴ヲ爲シテ居ルニ過ギヌ。此所ニ示ス所以外尙ホ諸多ノ材料ニ就イテ之ヲ攷フルモ、開戦以後我國ニ於ケル物價騰貴ノ原因ヲ爲セル重ナルモノハ、右上グルガ如キ

軍需ニ關係アル貨物ヤ、右ニ所謂雜品中ニ含まレテ居ル可キ筈ノ染料トカ醫藥品トカ云フガ如キ輸入困難ナル貨物ヤニ過ギナイノデアツテ、其他普通貨物ハ或ハ不落シタリ或ハ僅カバカリノ騰貴ヲ爲シタルニ過ギヌ。尤モ昨年末頃ヨリハ一般ニ多少此等ノ品々モ騰貴ノ勢ヲ呈シ來ツタ様デハアルガ、固ヨリ未ダ餘リ顯著ナルモノデナイ。

サレバ之ヲ要スルニ我國ノ物價ハ或特殊ノ貨物ヲ除クノ外ハ一般的ニハ開戰以後ニ於テモ未ダ餘リ著シキ騰貴ヲ爲シテ居ラヌト見テ大過ナイ。即チ彼ノ突飛ナル騰貴ヲナシタ特殊貨物タル染料ヤ醫藥品ヤ金屬ヤヲモ入レテ一般物價トシテ示サル所ニ就イテ見テスシモ、尙ホ前々表ニ於テ之ヲ知り得ベキガ如ク、本年六月ノ指數(一四七・四六)ハ戰前最後ノ月タル一昨年七月ノ指數(一二五・七五)ニ比シテ、其差二・七一二過ギズ、之ヲ歩合ニシテ見テ一七・二九%タルニ過ギヌ。即チ本年六月ノ物價ハ一昨年七月ノ物價ニ比シ僅カニ一割七分強ノ騰貴ヲ爲シ

タニ過ギヌ。之ヲ前掲英國ノ同期間ニ於ケル六割三分弱ノ騰貴ニ比較シテ見レバ、洵ニ僅カバカリノ騰貴ヲ爲シタニ過ギヌト謂ツテ可イノデアル。

五 日英ノ物價騰貴ノ歩合ガ右ノ如ク大イナル懸隔ヲ有スルハ、交戰事情ノ關係上彼我ノ一般ノ時情ノ相違ヨリ見テ、固ヨリ當然ノコトデアルガ、當然ナルニモセヨ斯ク事實トシテ彼我ノ間ニ甚シキ懸隔アルコトハ、我國ニ取ツテハ決シテ悲ム可キ事デハナイ。大ニ意ヲ強クスルニ足ルモノデアル。今後若シ在外正貨ノ處分等ニ於テ處置宜シキヲ失ハズ、兌換券ノ濫發等ノコトナキヤウ警戒シ萬事ヲ慎重ニシテ此ノ現狀ヲ餘リ狂ハサヌニ努メ、我國ノ物價ヲシテ此上餘リ騰貴セシメズ、少クトモ交戰諸國ニ比シテハ大イニ下位ニ在リ、米國其他ノ中立諸國ニ比シテモ尙且多少ハ下位ニ在ルヲ失ハシメヌヤウ注意シテ遣ツテ行ツタナラバ、今日以後戰後ニ至ル迄、貿易狀態ノ如キハ永ク好調ヲ保ツヲ得ルデアラウ。常ニ多少ノ輸出超過ノ勢ヲ續ケテ行

クコトモ出來ルデアラウ。又國內ノ經濟狀態モ
狂奔スルコトナク着實ニ進ミ行クヲ得テ、健全
ノ發達ヲ爲シ得ルデアラウ。勿論コレハ他ノ事
情ノ著シク惡クナラナイコトヲ條件トシテノ話
デアル。(七月二十四日稿)